
こんな日常どうですか？ / 沖神

シルヴィア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こんな日常どうですか？ / 沖神

【Nコード】

N3348BA

【作者名】

シルヴィア

【あらすじ】

いつも通りに喧嘩をしていた沖田と神楽の前に現れたのは？

（前書き）

沖神小説初投稿（^^）v

自分で描いた沖神マンガを小説にして投稿しました！沖神＋兄です

ネタバレ（笑）

こんなだったらいいなあという私の妄想なので、気が向いたらどうぞ（^o^）／

ここはかぶき町のとある公園。そのベンチの近くで今まさに二人によつて、激しい闘いが始まるうとしていた。

だが、周りの人々は気にすることなく遊具で遊んでいる。

理由は単純。それはこの公園にいる人々にとって”いつものこと”であるから。

そして今闘いを始めようとしている二人…いや黒い服の青年とチャイナ服の少女にとつても”いつものこと”である。

黒い服の青年――

「げっ…嫌なやつに会っちゃったでさあ。」

沖田総悟は武装警察真選組の一番隊隊長。

だがその爽やかなルックスとは裏腹にドSである。

チャイナ服の少女――

「それはこっちの台詞ネ。」

なんで毎度毎度お前に会わないといけないアルか？

神楽は宇宙の戦闘民族夜兔であり、万事屋銀ちゃん働いている。

「山からサルが下りてきたかと思つたぜい。」

「なっ！レディーに失礼ネ！」

「あつ、すいやせん。サルに失礼でした。」

「ムキー！！どどういう意味ネ！！！」

売り言葉に買い言葉、周りの人々は毎回毎回よく飽きないもんだな……という目で見ている。

だが、その様子を興味深そうに木の影から見ると一つの影があつた。

そして沖田が刀を、神楽が傘を構え闘いが始まる――

「あれ？神楽？」

はずだった……。

始まらない理由はただ一つ、一人の橙色の髪を持つ青年の声によって遮られたためである。

その声の主の方に二人は同時に振り向き、それぞれ違った反応を見せる。

沖田は一体誰なんだ？という顔を、
神楽はひどく驚いた顔をしていた。

しばらくして、…チャイナを呼び捨てに…と思いつつ、沖田が口を開いた。

「あんた、誰ですかい？初めて見る顔でさあ。」

（でもこいつの顔どこかで…）

「…にき…。バカ兄貴！！」

質問している沖田の後ろから神楽は叫んだ。

そう橙色の髪をした青年とは、神楽の兄であり、かつて夜兔の古い風習である”親殺し”を行い、

あの星海坊主から片腕を奪った神威だった。
現在は宇宙海賊春雨の第七師団団長である。

「やあ、久しぶり。」

飄々とした口調で神威は答える。

それに比べて神楽は取り乱した口調で

「何の用アルか？銀ちゃんとは闘らせないネ！！」

「別にお前に用は無いよ。それに、銀髪のお侍さんはまだ殺らないよ。」

それよりさ、君、誰？」

神威は沖田の方を向く。

（チャイナの兄貴ってことは、夜兔族か…）

「地球《ココ》では相手に名前を聞くときは、まず自分から名乗るもんでさあ。」

「へえ…そうなんだ。じゃあ俺の名は神威。で、君の名は？」

（…気に入わねえ…）

「真選組一番隊隊長、沖田総悟でさあ。」

沖田が真選組と名乗ると神威は驚いた様子で

「ふーん…、これがシンスケが言ってた真選組ってやつかあ。」

「シンスケってだれアルか？」

神楽も沖田も判らないという顔をしている。

「なんでもないよ。こっちの話。

ところでさ、もしかして君、侍ってやつ？」

その言葉を聞き、神楽はハツとする。

何故なら神威は――

「ち、違うアル！こいつはただのサドヤローで侍な…」
「そうですぜい。」
「」

すると神威は笑顔を浮かべながら

「へえ、やつぱりおもしろいね、侍って。

出来の悪い妹だけど、よろしく頼むよ。じゃあね、” 沖田総悟 ”。」

そう言い残して神威は去っていった。

神楽が疑問に思ったことを口に出す。

「…あいつ…結局何しにきたアルか？」

「さあな。そういえばチャイナ…さっき、なんで俺のことを待じやないって否定したんですかい？」

神楽は顔を赤くしながら答える。

「ノノノ、それは、バカ兄貴は気に入ったやつをすぐ殺そうとするし、お前のことを気に入って闘ったらお前が勝てるか分からないし…」

「って…！お前には関係ないダロノノノ」

沖田は一瞬驚いたが、すぐにいつものポーカーフェイスに戻り、
「それって、俺のことを心配してたってことですかい？」

「ち、違うアルノノ勘違いすんなヨ…！」

「まあ、今はそういうことにしといてやりませう。」

E
N
D

（後書き）

お疲れ様でした！

感想とかあればよろしく願いしますm——（m

第二弾はただ今作成中。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3348ba/>

こんな日常どうですか？ / 沖神

2012年1月8日18時46分発行